関西自然保護機構会報 15(2): 73－74, 1993

巻頭言

自然観察会から考える

大阪府立大学農学部　佐　藤　治　雄

1985年５月に「百樹会」と称する樹木の観察会をはじめて８年半ほどになった。大阪の自然保護団体のひとつ，(社)大阪自然環境保全協会の定例観察会のひとつとして，だいたい１カ月に１回のわりあいで開催したが，雨で中止したり他の都合で開かないこともあったから，つい先日の観察会が80回目であった。毎回，参加者を記録しているので大まかに集計したところ，のべ2,500人あまりが参加したことがわかった。最近２，３年の男女比率を見ると，女性57%，男性43%ということになっている。年齢的には50歳台以上の人が圧倒的に多く，なかには70歳以上の方もかなりおられる。その反面，20歳台，30歳台の参加者は極端に少ない。また，若い父母が子供をつれてくる場合を除き，子供の参加はない。日曜日の午前中，２時間か２時間半の短い時間に，公園や植物園，里山のごく狭い範囲をまわるというゆっくりしたスタイルをとっていることが，参加者の年齢層にこういう片寄りを生じた原因であろう。若くて元気のいい人には，少々まどろっこしく，頼りないのかも知れない。

この観察会では，人間の生活にとって自然がいかに大切かを正面切って論じたり，環境破壊に反対するキャンペーンを張ったりしないことを原則としてきたから，この種の観察会が自然環境を守ったり，環境破壊を阻止する上でどんな役に立っているのか，正直いって心許ないところがある。私自身，自然と人間の関係のありようにはさまざまな形があり得ると思っているものだから，自分の自然にたいする考えを絶対正しいものとして人に押しつけようと思ったことがない。自然保護団体の観察会でありながら運動体としての性格をあまりもっていない原因のひとつであろう。ただ，だれか賢い人の書いた自然保護論を観念的に振りかざす人がふえるより，自然とふれあうことを通じて，身近かに自然が必要だと生理的に要求する人がふえることの方が，自然環境の保全をすすめる上で大事だと思うから，このような機会を通じて自然とふれあい，自分と自然との関係をより緊密なものにしていく人がふえることもなにがしかの力になっているはずだとは思っている。このことは，参加者の中に，近所の公園や街路で樹木が強い剪定をうけるたびに，そんなに枝を切らないでくれと作業員や公園課にクレームをつけにいく人や，各地で行われる，とくに自治体主導の開発事業に敏感に反発している人がたくさんいることでも感じられる。

しかし，考えてみるとこのような観察会に参加する年輩の人たちは，意識したかどうかは別にして，子供のころに今よりははるかに豊かで質の高い自然環境にふれた経験をもっているのだから，その経験と結びついて，このようなわずかな機会をとらえて植物とふれあいたいと望むのも当然かも知れない。もし，この人たちが子供のとき自然とふれあう機会をもたなかったとしたら，ちょっと観察会にでも参加しようという気持ちになったであろうか。自然との接触という原体験なしに，ほんとうの意味で自然を保護しようというエネルギーはでてこないのではないかと思う。

そういう目でみると，いま私たちのまわりにあ

る自然的な環境が真の意味での「いのち」を感じさせるような自然といえるだろうか。私たちの子供の時代にくらべ，水田面積やため池の数が激減し，雑木林や原っぱが少なくなったことは確かだが，それでも完全になくなってしまったというわけではない。もっと深刻な変化は，残された田畑やため池，原っぱなどの質的な変化のような気がする。むかしは水田や水路にごく当たり前にいたイナゴやヤンマが今はほとんどいないし，ドジョウもフナもモロコもいなくなった。私たちが子供のころは田んぼや原っぱには魅力があったが，今の田畑や水路，ため池には子供をひきつける魅力にかけている。多くの子供たちは，自然とふれあう機会をもたずに成人していく。なんとなく，おそろしい気がする。

子供たちの生活の場の中に自然とふれあう機会がないとすれば，どこかでそのような場を用意することが必要なのかも知れない。大阪自然環境保全協会では，大阪府緑化環境協会（府の外郭団体）の委託をうけて，1990年から３年間，「府民の森」３園地での観察会を，年数回のわりあいで開催した。この委託を機会に，グリーン・レンジャーと名づけた大学生・専門学校生クラスの若い観察会リーダーの養成をはじめ，その人たちと観察会にあたった。この観察会の参加者は百樹会と違って若い親子づれのグループが中心で，さきにのべた子供が自然とふれあうひとつの場を提供したと思うし，参加者にはそれなりの満足をしてもらったとも思っている。

しかし，きめ細かく自然とふれあうためには多人数ではうまくいかないから，いきおい十数人のリーダー，サブリーダーに対し，数十人の参加者という規模に限定したにもかかわらず，ときには定員割れの参加者しかない観察会というのは，施主である緑化環境協会にすれば，投資効果からみて，あまり満足いくものではなかったようである。うまく行けば５年間ぐらいは継続したいという当初の計画も，担当者の交代などもあって，結局，３年間で打ち切りとなってしまった。

一方，観察会リーダーになろうという若い人たちがわんさといるかといえば，決してそんなこともない。毎年，せめて20人程度は確保したいと思っていたが，応募者数はその６，７割程度にすぎないし，さらに定着してリーダーとして育っていくのは，その中のまた半分以下というのが実情である。こういう活動に多少の関心をもって参加してみても，じっくりと生き物と接するのは生まれてはじめてという若者たちにとって，子供の遊び相手以上のレベルに達するのも楽ではないのであろう。

考えてみると，私たちの子供のころには観察会なんかなかったし，特別な指導をしてもらった記憶もないが，それでも野外の遊びを通じていろいろな生き物の生きる姿にふれることができたと思う。それはとりもなおさず，身近な生活環境の中にまだ生き物がいたことの証拠であろう。今の子供たちだって，そういう環境さえあればきっと同じ経験をすることができるはずである。問題は，だから，効率の悪い観察会を重ねるよりも，生き物にあふれた生活環境をいかにつくるかということになるのかも知れない。

最近，各地でビオトープとか近自然空間の創造とか，あまりに無機化しすぎた環境を改善しようとする動きが盛んになったような気がする。その内容についてはまだまだ問題が多く，羊頭をかかげて狗肉を売るたぐいのものや，大きく壊して小さくつくるというものも少なくないが，少なくとも方向としては望ましいものとして評価すべきなのかも知れない。そして，そのような動きを支えるのは，身近な環境の中にもっと自然をほしいと望む人間の数がふえることだとおもう。

道は遠いが，私がかかわっているささやかな観察会や若いリーダーの養成が，それに対する何がしかの貢献になればいいと考えている。